

優しさのループ

(原文)

西村 くるみ (16 歳)

埼玉県

本庄東高等学校

私は、優しさは人の心を豊かにしてくれる形のないスパイスだと思います。何気ない言動にも、優しさが加わるだけで、人を笑顔にすることができると思うからです。

私は、優しさを与えることのできる人の多くが、以前に他人から愛や優しさを、受けたことがあるのではないかと、思います。優しさは、良い意味で伝染していくものです。優しさを知り、その感覚を誰かにも感じてほしいと思い、優しさを言動にのせて、伝えるのです。

私は、優しさにあふれる社会をつくるにはまず、日本文化を大切にすることが鍵となってくると思っています。なぜなら日本には、「おもてなし」という誇るべきものがあるからです。私は先日、日本に在住する外国人に密着した番組を観ました。その方の日本に住むきっかけが、コンビニの店員さんの「お弁当、温めますか。」

という一言だったのです。日本では、当たり前感じていたその接客が、海外のお客さんの心を動かしてしまったのです。日本の「おもてなし文化」の素晴らしさを改めて感じました。そう、私たちは見逃しているだけで、多くの優しさに囲まれていたのです。

だから私は、次にすべきことは、普段のあたり前の生活の中から、優しさを見出すことだと思えます。小さな優しさに気づける心を持つことで、またその人の優しさが養われるからです。「優しさ」や「思いやり」といったことを、五教科のように事細かに教わることはありません。道徳などで、物語のなかから読み説くことはあります。ですが、授業の一環として「学ぶ」ことと、自ら「体感」することでは、優しさとの距離に大きな差が出ます。

私は小学二年生の頃に、松葉杖を使って生活していた時期がありました。それは、二週間ほどで、それほど長くはありませんでした。しかし、とても不便で、靴を履きかえることでさえ、困難に感じました。小学二年生ということもあり、長い休み時間になると、元気に外に遊びに行くことが普通になっていました。しかし、その当時はそれが困難でした。一人ぼっちになのだろう、と思いこんでいました。ですが、二人の友だちがいつも私の側にいてくれたのです。教室でできる遊びや恋愛の話など、私の体に負担のないように気遣ってくれてたのです。二人に申し訳ないという気持ちと、ありがとうという気持ちで、当時少し混乱したのを覚えています。また、二人は登下校の際に荷物を手分けして持ってくれたり、私の分まで給食を運んでくれたりと、たくさんの優しさを私にくれました。誰かに優しさをも

らった思い出というのは、忘れないものです。また、思い出したときに心が温かくなります。この感覚は、ほかの何かでは味わえない貴重なものです。私は、この体験をしたことで、自分以外にもこの気持ちを味わってほしいと思うようになりました。優しさは、ループします。他人に優しくすれば、返ってきます。ですが、現代では、そのループが途絶えているように感じられます。私は、それがスマホのせいではないかと思います。他人の顔よりも、スマホの画面に顔が向いているのです。他人への興味が薄くなった今の社会では、優しさを求めること自体難しくなってしまったのでしょうか。海外の人が驚く日本のあたり前を取り上げてみるのはどうでしょうか。みんなが顔を上げて、挨拶を交わしあう世の中になってほしいです。今の日本には、協調性が欠けているのかもしれませんが。そのために、若い世代の人が出来ることは、日本文化を見つめ直し、海外との交流をすることだと思います。